



'62年生まれ。明治大学特任教授。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員などを経て、文筆業に。『ダンディズムの系譜——男が憧れた男たち』『モードの方程式』『愛されるモード』など著書多数。

「何しろ出会った人たちのインパクトが強烈でした。そして、過去のことなのだけど、とても新しい。『過去はいつも新しく、未来は不思議に懐かしい』という、確か劇団『プリキの自発団』の芝居の台詞だったと思いますが、まさにそんな気分がびったりでした」

この本に登場する人それぞれの思想やアイデア、方法論、人間関係の作り方などは、確かに斬新で古びていない。でも通用するか、もつといえませんがまだ先を行っているのかもしれない。

「ポール・オースターの『トゥルー・ストーリーズ』ではないですが、自分もトゥルー・ストーリーで行けばいいのかな、と思うようになってきました」  
特に母・葉子さんの章は、実話でありながら、もはや手練の短編小説の味わいであることを付け加えておきたい。



新潮社 1,470円

# モードとエロスと資本 中野香織さん

なぜ男のスーツは細いのか。着ることから見えてくる時代の表と裏を描き出す。

前々から不思議に思っていたのである。今時の若い男性のスーツはなぜあ小さめで、きつきつなのか。若い女性の服装が時として、なぜ、ああもセクシーで、露出が過剰なのか。

そんなファッションについての疑問に答えてくれるのが、服飾史家・中野香織さんの新著なのである。

H&Mやユニクロなど、ファストファッションと称されるトレンドイデオロギイながら安価なブランドの台頭。ますます存在感を増す、女性誌におけるストリートスナップ写真。エコロジー、地球環境を標榜するファッションブランドの目指すもの。百年に一度とも言われる大不況下、モードも変化にさら



'46年、東京生まれ。演劇実験室「天井桟敷」の演出家や俳優、パル発行の雑誌『ピククリハウス』の編集長などを経て、現在、多摩美映像演劇学科教授。エッセイスト、映像作家と多彩な顔を持つ。

され、新しい現象を生み出している。

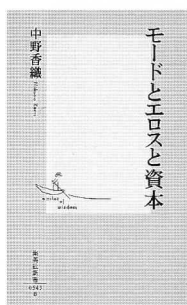
「スーツのコンパクト化は私もどうしてなんだろうと、気になっていたんです。そこに森岡正博さんの『草食系男子の恋愛学』を読んで、また男性同士の殺人事件がこの40年間でざっと10分の1になったという話を編集者から聞いて、なるほど、と」

いい人であれば女性はついてくるといって受け身の恋愛観、「若い男が男同士で張り合わず、配偶者獲得の競争に背を向けている」現象と小さめサイズのスーツの間にあるかもしれない因果関係。「アメリカでは『鯨を救え』(Save the Whales)にひっかけて『男性を救え』(Save the Males)という題名の本が出るくらい男性は繊細化しているとか。それはグローバルな傾向のようです」

服を選ぶこと、時代の服を見たり着たりすることは社会を見ることと同義

だし、とても面白いことだとこの本は気づかせてくれる。「カワイイ」と「エロイ」という「二大概念」がファッションに与えた影響についての件も刺激的。「私自身はファッションに特に興味があったわけではないんですが」といって中野さん。見て好きなのは「過激で発想が自由な」ジョン・ガリアーノの世界、着て好きなのは芦田淳さんと娘の多恵さんの作る服。

「何々らしくというのが嫌いなんです。母親らしくとか先生らしく、とかね」といって言葉どおり、大学1年生と小学4年生の2児の母ということを感じさせない、大人の女性のたまたままだ。



集英社新書 714円